

第一回星野立子賞受賞句集

『はじまりの樹』 三十句抄

津川絵理子

四五人の雨を見てゐる春火桶
秋色に竹の枯れたる雨水かな
切り口のざくざく増えて葎にほふ
教室の入口ふたつヒヤシンス
摘草に永き踏切ありにけり
つばくらや小さき鬚の力士たち
真清水を飲むやゆつくり言葉になる
滝涼しともに眼鏡を濡らしめて
骨切りの鱧を畳んで持たさるる
葎障子透けて誰とも目の合はず
籐椅子の腕は水に浮くごとし
亀ときに夏の落葉の音を曳き
バケツ一杯の白球晩夏光
踏み台を椅子に机に涼新た
夜通しの嵐のあとの子規忌かな

秋草に音楽祭の椅子を足す
望の夜の人にてのひら魚に鱈
おとうとのやうな夫居る草雲雀
木犀やバックミラーに人を待つ
長き夜を滅びへローマ帝国史
貼りかへし障子の白さ何度も見る
飛行機の小さき窓に秋惜しむ
笹鳴や亡き人に来る誕生日
子規の目がありぬ枯草枯葎
綿虫や仕舞ひつつ売るみやげもの
深々と伏し猟犬となりにけり
捨猫の出てくる赤き毛布かな
暁の火事見て試験一日目
綾取や十指の記憶きらめける
砂時計の砂のももいろ春を待つ